２０２４年度　第１回　入学試験問題

国　　語　（５０分）

解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

一　次の――線のカタカナ部分を漢字に直しなさい。

1　ケイソツな行動。　2　はだにココロヨい風。　3　ゼンゴ策を考える。

4　トウシツをひかえる。　5　ガイロ樹を植える。　6　ザッコクを食べる。

7　ジュウオウに動き回る。　8　すばらしいコウセキをあげる。

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（句読点や記号も一字と数えます。）

1　どのような状況になるのかがよくわからないときに計画を立てるのは、起こりうるさまざまな状況を想定しなければならないから、本当にたいへんである。それぞれの状況のもとでいちいちどうするかを決めていかなければならないので、その計画は複雑かつ膨大なものとなろう。しかも、想定した状況のほとんどは【　X　】から、せっかく立てた計画も、その大部分は活用されず、無駄となる。

そうだとすれば、むしろ計画を立てず、その場で対処するほうがよいのではないだろうか。たしかに事前の計画が必要な場合もあるが、積極的にその場の対処に任せるほうがかえって効率がよいことも多い。

このような考えにもとづいて最近よく用いられるようになった言葉が「アジャイル（agile）」である。この言葉は、辞書的には「機敏な」とか「身軽な」を意味するが、コンピュータのソフトウェアの開発において、従来とは異なる新しい開発手法を表すのに用いられるようになった。すなわち、ソフトウェアを開発するさいに、初めからすべての工程にかんして綿密な計画を立てるのではなく、まずは小さな単位で試しながら、試行と①修正を繰り返してソフトウェアの全体を完成させていくという手法である。

このソフトウェアの開発における用法が拡張されて、②「アジャイル」という言葉は、いまでは行動一般にかんして用いられ

るようになった。すなわち、何らかの行動をしようとするとき、事前にきちんと計画するのではなく、進行中のその時々の状況に応じて適当にどうするかを決め、うまく行かなければ修正を行うといったことを繰り返して、行動全体を完遂するというやり方が「アジャイル」とよばれるようになったのである。

仕事の打合せのなかで「アジャイルで行こう」と言われた場合、それはようするにその場でやりくりしようという意味である。私たちはついつい、しっかりした計画を立てて、絶対に失敗しないようにすべきだと考えがちであるが、そのような緻密な計画を立てることは、実際上ほとんど不可能であるか、あるいはきわめて効率が悪い。緻密な計画にこだわるのは、失敗にたいする「病的な恐怖」によるところが大きい。

[a]、恐ろしくて飛行機に乗れない人がたまにいる。そのような人は飛行機の安全性を十分理解していても、飛行機に乗るのを恐れる。たしかに危険な状況で恐怖を抱くのは適切であり、それは逃げるといった行動を引き起こして、じっさいに害を被ることを防いでくれる。[b]、危険でない状況で恐怖を抱くのは不適切である。それは害の未然の防止に役立たないどころか、有益な行動を妨げもする。飛行機への恐怖は、③このような病的な恐怖である。

最近、「正しく恐れよ」とよく言われる。放射能に汚染された食品であっても、汚染度は低く、健康に影響はないのに、恐ろしくて食べられない人がいる。このような人は、危険度に見合った「正しい恐れ」ではなく、それに見合わない病的な恐怖を抱いているのである。

緻密な計画へのこだわりも、失敗への病的な恐怖に支配されている可能性が高い。緻密な計画を立てなくても、アジャイルでやっていけば、失敗することはほぼないにもかかわらず、失敗を恐れて、可能なかぎり緻密な計画を立てようとする。たとえ計画を立てるのが無駄であり、その場で適当にやってもうまくやれるということを頭でよく理解していても、どうしても失敗への恐怖がなくならない。こうして計画を立てずにはいられないのである。

[2]

アジャイルで行くことは、一見、いい加減で、行き当たりばったりのようにみえるかもしれないが、計画を立てるよりも、アジャイルで行くほうが効率的で、成功する確率が高い場合もある。だからこそ、アジャイルで行くのである。私たちがアジャイルではなく、しっかりした計画に向かいがちなのは、アジャイルがいい加減で失敗の可能性が高いからではなく、[c]失敗への恐怖があるからである。あえてアジャイルで行くことは、そのような病的な恐怖の克服にもつながる。

もちろん、アジャイルが重要だと言っても、計画がいっさい無用だというわけではない。過度に緻密な計画は無用だが、適度な計画は効率の面でも、成功率の面でも、重要である。結局、適度な計画を立て、あとはその場のやりくりに任せることが大切だ。つまり、計画とアジャイルの適切なバランスが何と言っても重要なのである。

アジャイルでやっていくには、その場の状況に応じて的確に対処する能力、つまり臨機応変の能力がなければならない。ヒーローはたいていこの能力に秀でている。『００７』のジェームズ・ボンドは、ビルの屋上や水上などでじつにスリリングな戦いを見せるが、どんなに窮地に陥っても、手持ちの小道具やその場にある物を巧みに利用して、きわどく危機を脱していく。そんなに都合よく小道具や物があるわけないだろうと思いつつも、俊敏な対応能力に感心させられる。

このような臨機応変の能力は④身体知の一種である。それは身体で覚えた知であり、脳だけではなく、身体にも刻みこまれた知である。ただし、身体知のすべてが臨機応変の能力だというわけではない。たとえば、舗装した道路でしか自転車に乗れないとしよう。このとき、自転車に乗る身体知をもっていると言えるが、臨機応変の能力をもっているとは言えない。砂利道でも、芝生の上でも、でこぼこ道でも、それらに対応してうまく自転車に乗ることができてはじめて、臨機応変の能力があると言える。ボンドのような臨機応変の能力は、身体知のなかでも、多様な状況に対応できるようなタイプの身体知、すなわち「多面的身体知」なのである。

私たちは、ボンドには遠く及ばないにせよ、多少なりとも、このような多面的身体知をもっている。混雑した駅では、いろいろな人とさまざまな仕方でぶつかりそうになるが、たいていうまくよけることができる。会社にいけば、上司や同僚など、さまざまな人から挨拶されるが、相手に応じて適切に挨拶を返すことができる。このような多面的身体知をほとんど無意識的に行使することで、私たちの日々の生活は成り立っている。

3

ところで、臨機応変の能力には、このように状況に応じて適切に「行動する」能力だけではなく、状況に応じて適切に「考える」能力も含まれる。こちらは身体を動かす能力ではないので、身体知ではないが、臨機応変の能力のひとつである。

たとえば、紅葉の季節に「そうだ、京都に行こう」と思い立ち、家を出る。計画と言っても、新幹線で行くというきわめておおまかな計画しか立てていない。駅に着いて、自由席にするか、それとも指定席にするか考える。混み具合を調べてみると、自由席は座れないようだが、指定席は一時間後にしか空いていない。早く行きたい。まあ、座れなくてもいいかと思って、自由席の切符を買う。

こんな調子で、その場、その場で、適当に考えて、やりくりしていく。そうすれば、たいした計画を立てなくても、無事に京都にたどりつける。ここでは、状況に応じて適切に考えるという臨機応変の能力が大きく物を言う。

その場の状況に応じて考える能力も、行動する能力と同じく、訓練や実地経験によって鍛えることができる。人によって臨機応変の思考能力に違いがあるのも、生まれつきの素質の違いもあるだろうが、訓練や実地経験の違いによるところが大きい。

私が数人の友人と一緒に北京に行ったとき、夕飯を食べに街中のレストランに入ったことがあった。私たちは誰も中国語ができなかったが、英語が多少通じるだろうと思っていた。しかし、残念ながら、英語もまったく通じなかった。そのとき、一人が紙に

漢字を書いて店員に見せたところ、見事に通じた。私はそんなことを思いつきもしなかったので、彼の[i][ii]におおいに感心した。どうしてそんな[i][ii]が利いたのかと聞いてみたところ、彼は似たような状況を経験したことがあると言った。

思考における臨機応変の能力も、行動におけるそれも、訓練や実地経験によって育まれる。したがって、訓練や実地経験の違いによって、臨機応変の能力にも個人差がある。自分の臨機応変の能力を見誤ると、その場で適切に対処できず、立ち往生することになる。アジャイルでやるときには、自分の臨機応変の能力を正しく自覚することが重要である。自分には臨機応変に対応する能力があまりないと思えば、アジャイルの部分を減らして、計画の部分を手厚くしなければならない。つまりは、⑤臨機応変の能力を正しくわきまえたうえで、計画とアジャイルのよいバランスをとることが肝心なのである。

（信原幸弘『「覚える」と「わかる」　知の仕組みとその可能性』筑摩書房より）

問一　空らん【　X　】に入る言葉を五字以上十五字以内で答えなさい。

問二　――線①「拡張されて」とありますが、文章中におけるこの言葉の意味として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア、他の場面でも使われるようになった。　　イ、他の表現があてはまるようになった。

ウ、他の文章でもよく見かけるようになった。　　エ、他の言葉が英語以上に適切だとわかった。

問三　――線②「アジャイル」とありますが、筆者は文章中でこの言葉をどのように言い換えていますか。次の文の空らんに当てはまる十五字の言葉を、これより前の文章中から探し、抜き出して答えなさい。

（　　）**というやり方。**

問四　空らん[a]、[b]、[c]に入る最もふさわしい言葉を次のア～オの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号をくり返すことはできません。

ア、むしろ　イ、たとえば　ウ、まるで　エ、もちろん　オ、しかし

問五　――線③「このような病的な恐怖」とありますが、それはどのようなものですか。「理解」という語を用い、「～にもかかわらず～こと」という形で筆者の主張をまとめて答えなさい。

問六　――線④「身体知」とありますが、筆者が考える「身体知」としてふさわしくないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、小さいころから水泳を習っていたので、小学六年生になった今も、上手に泳ぐことができる。
イ、「社会」の授業で歴史上の人物名を覚えるのに、何度も声に出したことで暗記することができた。
ウ、友達にカブトムシがよくとれる木を教えてもらい、そこに行ってみると何びきもとることができた。
エ、歯みがきの指導を受けて、しだいに奥歯（おくば）まできれいに歯をみがくことができるようになった。

問七　空らん[i][ii]に漢字を一字ずつ入れると二字熟語になります。次のア～コの中から当てはまるものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア、期　イ、起　ウ、機　エ、規　オ、気　カ、点　キ、展　ク、典　ケ、転　コ、天

問八　――線⑤「臨機応変の能力」とありますが、この能力について説明した次の文の空らんⅠ・Ⅱに当てはまる言葉を、Ⅰは[3]の文章中から七字、Ⅱは[2]の文章中から十七字で探し、それぞれ抜き出して答えなさい。

（　　Ⅰ　　）によって高められる（　　Ⅱ　　）能力。

問九　この文章の内容と合うものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、アジャイルで行くためには、事前にしっかりとした計画を立てる必要がある。
イ、アジャイルは数種類あるので、場面に応じて使い分けなくてはいけない。
ウ、アジャイルの欠点は、予測できないことに対してはうまく働かないことである。
エ、アジャイルをうまく使えるかどうかが、効率的な仕事を行うカギである。
オ、アジャイルを活用するかどうかは、一緒（いっしょ）に作業をする人にゆだねられている。

問十　この文章の筆者の主張をふまえて、次の問いに答えなさい。

夏休みの宿題として課された「一冊の漢字ドリルを提出日までに終わらせる」という作業を、ある小学生が最も効率的に行い、成功させるためには、どのようにすればよいですか。くわしく説明しなさい。

三　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（句読点や記号も一字と数えます。）

その週の土曜日、季節外れの台風が近づいていた。午後には上陸するらしい。

ぼくは、自転車を立ちこぎして学校に行った。台風の時って、なんでこんなに興奮するんだろう。

学校に着くと、すぐに平林先生の指示で、①台風対策を始めた。

ネットをかけて全部を覆ってしまうというのが一番いいのだけど、②ぼくたちの畑は、人参や枝豆のような背の低い野菜と、トウモロコシやオクラのような背の高い野菜とが入り組んで植わっているので、うまくネットをかけることができない。

人参と枝豆には根元を守るために土寄せをし、トウモロコシとオクラは、支柱がちゃんと埋まっているかを確認して、もう一度、ひもをしっかり結びなおした。しっかり、といっても、ぼくが結んだから、あまり自信がない。アズサがいてくれたら、ちゃんと［A］ができているか、確認してくれたと思うけど。

今日、アズサは畑に来なかった。オクラが採れるようになってから、アズサは毎日来ていたから、今日も来るんだろうとみんなが思っていて、誰もアズサに連絡をしなかったのだ。今から呼んだら来るかもしれないけれど、来たころには、作業は終わっているだろうから、ぼくたちはアズサ抜きで作業を続けた。

途中で、前川先生が、物置が倒れないかと心配して様子を見に来てくれた。

「それほど高さはないし、隣に駐輪場もあって、直接風を受けないからだいじょうぶだろうとは思うけど。」

そう言いながら、前川先生は、物置の各コーナーにアンカーをもう一つずつつけた。それから、コンポストのふたにも、風で飛ばされないように、ダクトテープを張ってくれた。

お礼のつもりで、なっていたオクラを全部採って、前川先生にあげると、前川先生は、うまい、うまいと言いながら、その場でぼりぼりと食べ始めた。ぼくたちの作ったオクラを、前川先生がそんな風に食べてくれたのが、とてもうれしかった。

風で飛ばされそうなものは全部物置の中にしまって、鍵をかけて作業を終了した。

帰る際、平林先生が、ぼくと西森くんに注意した。

「気をつけて帰りなさい。家に帰ったら、外に出るんじゃないぞ。台風が来てるのに畑の様子を見に行って、そのまま行方不明になってしまう人のニュースを聞いたことあるだろう。そんなことになったら大変だから、台風が完全に通りすぎるまで畑には来るなよ。」

以前は、そういうニュースを聞いた時、どうして台風の中、出ていっちゃうんだろうと思ってたけど、③今は畑の様子を見に行

く人の気持ちがよくわかる。

帰り道は向かい風で、自転車が全然進まなかった。ぼくは、自転車をこぐのをあきらめ、途中から自転車を降りて押して帰った。

やっとのことでうちに帰ると、十時になっていた。

「ただいま。」

返事がない。電気もついていない。お母さん、いないのかな。

電気をつけてダイニングに行くと、テーブルの上に、「水と食料を買いに行ってきます」と書き置きがあった。防災バッグの中に乾パンが入っていたと思うけど、あれじゃ足りないんだろうか。

ぼくは、キッチンに手を洗いに行って、ついでになにか食べるものがないか探した。朝早くから畑仕事をすると、おなかがすいて仕方がない。

菓子パンをつかんでリビングに行き、テレビをつける。

台風の直撃を受けそうな地域の海岸沿いで、レポーターが斜めになりながら、必死に叫んでいたけど、なにを言ってるのか、全然わからなかった。

画面が変わると、田んぼが映った。強烈な風が、稲を水面にたたきつけている。あの稲は、ちゃんと元に戻るんだろうか。

その映像を見て、ぼくたちの畑は、だいじょうぶなんだろうかと心配になった。とくに、ぼくが支柱に結んだひも。ほどけないといいけど。ヤングコーンとオクラは食べたけど、トウモロコシは食べてないんだから、どうか倒れないでほしい。

テレビを見始めて、結構な時間が経つのに、お母さんは、なかなか帰ってこない。水は重いから、車で買いに行ったと思うんだけど、どこまで行ったんだろう。

窓の外を見ると、公園の木がしなっていた。空が暗い。いつ雨が降り出してもおかしくない。マンションが、ゴオオッと不気味な音を立てて揺れたような気がした。このマンションは、そんなに古くないと思うし、地震対策とかもちゃんとやってあるだろうから、台風で倒れるってことはないと思うけど、ちょっとこわくなる。

お母さん、いつも家にいてうるさいのに、こういう時にかぎっていないんだから。なんかあったら、ぼく一人で、どうしたらいいんだろう。

そういえば、アズサはいつも一人だって言ってた。今も家で一人なんだろうか。心細いだろうな。

それよりも、支柱に結んだひもが気になる。いい加減に結んだつもりはないけど、百パーセントいぼ結びです、と自信を持って言えない。もしかしたら、ほどけてしまうかもしれない。もし、トウモロコシが倒れたら、たぶん、その下にある枝豆もだめになってしまうだろう。ぼくのいい加減な作業のために、みんなで一生懸命育てた野菜がだめになったら大変だ。やっぱり、今から

行って、結びなおしてこよう。
ぼくは、急いで玄関に向かった。
自転車と家の鍵を手に取り、ドアノブに手をかけようとしたら、その前にドアが開いた。
「うわあっ。もう、なに、朔弥、なんで玄関にいるの？びっくりさせないでよ。」
お母さんが、驚いて手に持っていたエコバッグを落としそうになっていた。
「お帰り、遅かったね。」
お母さんが、水のペットボトルを玄関に引き入れて、靴を脱ぐ。
「うん、大変だったんだから。モールに行ったら水が売り切れてて、駅の東側のスーパーまで行ったのよ。そしたら、事故があったみたいで、すごい渋滞でさ。ほら、水運ぶの手伝って。」
「お母さん、ぼく、ちょっと、畑に行ってくるよ。」
お母さんが、靴を脱ぐのをやめてぼくを見た。
「畑って、学校？」
「うん。」
「今、出てくなんてだめよ。」
「どうして？」
「危ないからに決まってるでしょ。すごい風なのよ。なにが飛んでくるかわからないじゃない。」
「でも、ぼく、ちゃんとひもを結ばなかったかもしれないんだ。そのせいで≪　Ⅰ　≫が倒れたら、オクラも≪　Ⅱ　≫も全滅しちゃうよ。」
「だめ。家にいなさい。警報が解除されても、しばらくは外に出たらだめだからね。川が増水してたりして危ないんだから。行くなら明日にして。」
お母さんのその言い方が、ぼくの気持ちは関係ないって感じで、無性に腹が立った。
「お母さんは、どうしていつも、ぼくのやろうとすることに文句を言うの？ぼくはだいじょうぶなのに。」
「いつも文句なんて言ってないでしょ。だいたい、なんの根拠があって、だいじょうぶって言ってるのよ。」
④「お母さんは、ぼくのことを信用してないんだよね。」
「信用してないんじゃなくて、心配してるんでしょ。あなたはまだ子どもなんだから。お母さんには、あなたを守る義務があるの。」
「お母さんは、心配なんてしてない。全部自分の思うとおりにしたいんだ。」

「そんなことない。」
「そんなことあるよ。お母さんは、お母さんの思う理想の息子っていうのがあって、ぼくをそれに近づけようとしてるじゃない。」
「なによ、その理想の息子って。」
「家でダラダラしてないで、喜んでサマーキャンプに参加して、ソーシャルスキルがあって、面接官の前でも親戚の前でも、[a]大きな声でしゃべって、お母さんの気に入るような、さわやかな優等生の友だちがいっぱいいるような子じゃないの？」
お母さんが黙った。
「お母さんがうるさく言ったって、ぼくはお母さんの思うような立派な息子になれないんだから、ほっといてよ。」
ぼくがドアノブに手をかけると、お母さんが、ぼくの手首をつかんで言った。
「あのね、朔弥が、毎朝、早起きして畑に行って、野菜や花を育ててるのは知ってるよ。でも、台風が来てるんだから。台風なんて、朔弥一人でどうにかできるものじゃないでしょ。危ないから家にいなさい。」
「でも、ひもを結びなおしたら、≪　I　≫は倒れないかもしれないじゃないか。」
「そうかもしれないけど、それは朔弥の命を危険にさらしてまですることじゃないでしょ。」
なんだよ、ぼくの命を危険にさらすって、そんなに大げさなことじゃない。大体、⑤ぼくの命なんて、大したことないじゃないか。
ぼくなんか……。
涙が[b]あふれてきた。
「ちょっと、なんで泣くのよ。」
「ぼくは……。」
「え？」
「生きる価値があるの？」
「なに、急に。当たり前でしょ。」
「ぼくは、ごみなんじゃないの？」
「ごみ？」
「お母さん、ぼくのこと、うざいと思ってるでしょ。ぼくはお母さんにとって、ごみなんじゃない？」
「は？　なんで、お母さんが朔弥のことうざいと思うのよ。朔弥は、頭いいし、優しいし、いいところいっぱいあるのに。」
「お母さん、いつも、そんなんじゃだめだって言うじゃん。」

「だめなんて言ってないでしょ？」
「言ったよ！　ソーシャルスキルがないとだめなんだって！　だから、ソーシャルスキルのないぼくは、この世の中じゃやってけない、ごみみたいなもので、生きる価値がないんじゃないの？　きっとトウモロコシの方が価値があるよ。みんなで、大事に育ててるし、食べたらおいしいんだから。」
「そんなわけないでしょ！」
お母さんに肩を［　c　］つかまれ、ぼくはよろけそうになった。
「やめてよ！」
お母さんの手を払いのけ、ドアを開けようとしたら、⑥お母さんが後ろから抱き着いてきた。
「離せ！」
体をよじって逃れようとしたけど、お母さんは、くっついたまま離れない。
「離すわけないでしょ。あのね、朔弥、お母さんは、ソーシャルスキルがあった方が、世の中生きやすいだろうと思ったから、ソーシャルスキルを身につけなさいって言ったの。ソーシャルスキルがない朔弥は生きる価値がないなんて言ってない。」
目をつむったら涙がこぼれた。
「ぼくは生きててもいいの？」
ドアに向かったまま、お母さんに聞いた。
「ソーシャルスキルが低くたって、なんだって、生きてていいに決まってるじゃない。そんな当たり前のこと、言わなくたって、わかってると思ってたわよ。」
お母さんが、ぼくに抱き着いたまま答える。
「口に出して言わないとわからないよ。」
ぼくがそう言ったら、お母さんは、
「まさか、朔弥にそんなこと言われるとは思わなかったわ。」
と言った。
「でも、そうだね。いいよ、言うよ。朔弥は、ごみなんかじゃない。お母さんの一番の宝物だよ。お母さんは、朔弥のことが一番大事。朔弥がいなくなったら、お母さん、悲しいよ。ソーシャルスキルが低くても、なんでもいいから、生きていてほしい。だから、こんな台風の最中に、朔弥を外になんて出さない。」
そう言われて、うれしいというより、ほっとした。そしたら、⑦もっと涙が出てきた。

「わかった。もう出ていかないから離して。」
「あー、暑い。」
お母さんが、ぼくの体から離れた。
「それにくさい。中学生男子、くさいわ。」
そうかな。確かにいっぱい汗はかいたけど。
「これ、照れ隠しだからね。言い慣れないこと言ったから、恥ずかしくなったのよ。くさくても、大事に思ってるから。くさいから生きる価値がないなんて言いださないでよ。」
そういうお母さんの声は、涙声だった。
お母さんは、靴を脱ぐと、
「ああ、疲れた。おなかすいたわ。ちょっと早いけど、お昼にしよう。お昼作りたくなくて、のり弁買ってきたから。」
と言って、ダイニングに行ってしまった。
ぼくは、リビングルームにお母さんが買ってきた水を運んだあと、手を洗いに洗面所に行って、ついでに顔も洗った。
それから、テーブルに着いて、二人でなにも言わずに［ d ］のり弁を食べた。
味のしみた、ちくわの磯部揚げがおいしい。
お弁当を家で食べることなんてないから、なんか変な感じ。お母さんとの距離感も変な感じ。
テーブルから窓の外がよく見えた。いよいよ大雨だ。さっきテレビでレポートしてた海の近くみたいに、雨が斜めに降っている。物置は飛んでいかないと思うけど、トウモロコシはだいじょうぶかな。
心配になるけど、⑧今は畑に行けないのだから仕方がない。明日、畑に行って、できることをしよう。
（花里真希『ハーベスト』講談社より）

問一　――線①「台風対策」とありますが、「台風対策」として「ぼく」たちが行っていないことを次のア～カの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、物置のコーナーにアンカーをつけたこと。
イ、風で飛ばされそうなものを物置にしまったこと。
ウ、野菜にネットをかけておおったこと。
エ、トウモロコシとオクラをひもでしばったこと。
オ、コンポストのふたにテープをはったこと。
カ、人参と枝豆の根元に土寄せをしたこと。

問二　――線②「ぼくたち」とありますが、この日に「ぼく」と一緒（いっしょ）にいた生徒はだれですか。文章中から探し、抜き出して答えなさい。

問三　空らん［A］に入る四字の言葉をこれより後の文章中から探し、抜き出して答えなさい。

問四　――線③「今は畑の様子を見に行く人の気持ちがよくわかる」とありますが、それはなぜですか。理由として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア、「ぼく」は、中学生になり大人に近づいたので、働く大人の気持ちがわかるようになったから。
イ、「ぼく」は、成長し度胸がついてきたので、まったく台風のことをこわがらなくなったから。
ウ、「ぼく」は、みんなで野菜を育てる喜びを知ったので、畑のことを心配する気持ちがわかるから。
エ、「ぼく」は、畑作りの大変さを二度と味わいたくないので、その苦労をいやがる気持ちがわかるから。

問五　空らん《　Ⅰ　》、《　Ⅱ　》に入る言葉をそれぞれ文章中から探し、抜き出して答えなさい。

問六　――線④「お母さんは、ぼくのことを信用してないんだよね」とありますが、「ぼく」がこのように思ったのはなぜですか。次の文の空らんに当てはまる十二字の言葉を文章中から探し、抜き出して答えなさい。

「ぼく」は（　　）ではないと感じているから。

問七　空らん［a］、［b］、［c］、［d］に入る最もふさわしい言葉を次のア～クの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号をくり返すことはできません。

ア、ぐいっと　イ、ちょこっと　ウ、じわっと　エ、長々と　オ、黙々（もくもく）と　カ、てきぱきと　キ、はきはきと
ク、ぞくぞくと

問八　――線⑤「ぼくの命なんて、大したことないじゃないか」とありますが、「ぼく」がそう思うのはなぜですか。次の文の空らんに当てはまる八字の言葉を文章中から探し、抜き出して答えなさい。

「ぼく」には（　　）が欠けていると感じているから。

問九　――線⑥「お母さんが後ろから抱き着いてきた」とありますが、それはなぜですか。理由としてふさわしいものを次のア～オの中からすべて選び、記号で答えなさい。

ア、「ぼく」が外出しようとするのをひきとめるため。
イ、「ぼく」に親としての愛情を伝えるため。
ウ、「ぼく」に対するうしろめたさをかくすため。
エ、「ぼく」の言いぶんを聞く気がないため。
オ、「ぼく」を絶対に危ない目にあわせたくなかったため。

問十　――線⑦「もっと涙が出てきた」とありますが、それはなぜですか。「～と言われ、～から」という形にまとめて説明しなさい。ただし、「自信」という言葉を必ず用いること。

問十一　――線⑧「今は畑に行けない」とありますが、「行かない」のではなく「行けない」と表現しているのはなぜですか。「ぼく」の気持ちにふれながら説明しなさい。ただし、「生きる価値」と「命」という言葉を必ず用いること。

二〇二四年度　第一回入学試験　解答用紙

国　語（一）

受験番号

氏　　名

一枚目

二枚目

合計

一

1 ケイソツ

2 ココロヨ（い）

3 ゼンゴ（策）

4 トウシツ

5 ガイロ（樹）

6 ザツコク

7 ジュウオウ

8 コウセキ

二

問一

5

問二

問三

問四

a

b

c

問五

問六

問七

i

ii

問八

I

II

問九

問十

二〇二四年度　第一回入学試験　解答用紙

国　語（二）

受験番号			

氏　　名

三

問一

問二

問三

問四

問五

Ⅰ

Ⅱ

問六

問七

a

b

c

d

問八

問九

問十

問十一